部類記

供奉記

わ210.09
16
37

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

供奉記

東京圖書館
和書門
政書類
九函
六架
三九號
六四冊

往
64
25

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

東京圖書館藏書

供奉記

慶長十九年秋のあらより世の中何となく騒敷御座
大坂より使者旅人喜歡ならなし早馬發源を
お往来の人迄も心靜ならされは西洲の法使とし
て十月朔日當三日迄に殿府へ着のこと　大御所様
御機嫌伺申遣くとの事に付て明と西人菓京の時は
源栄と西人にて了明を別の法使僧なりしが此度
を源栄在る故了明と西人相筆様に中に人馬を
いたしき曉天發足雨かし降今夕發源に着る人
事に足にて使僧を人西郷は横江中府に着に着

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

翌日は箱根に着居中、極さをかしく人馬のと勢
あり、事絶万なし。二時にて奥品の伊達が家来後
府より駐海に行逢、物語を吹て、日本国中又乱世と
なる迄な里、国倉侍の中分、降り大きゆうさん有れ
に於て寸と西人お笑ひ遣まば東国より法陣船を兼
里遣し、諸大名も法侍の名、大御所様の法様子
伺んと見な里と咋るに百倍し、往来探合、京江戸
のことくな里結連とも西海は法海依守一の事なれば
捨れが使ひいかなる諸大名の人馬も敵くにハ
及ぶ寸、実に末代念佛守一の利益なりと驚籌の

者共にも十念を授事ハ遣ば、彼来も西海の名号な
とを乞願つる事数十人なり、又宿て支配の司ども
無事、家々共に菓子、産物を持来れるも、将軍様の
法海依頼なり、敵々者、雲水の時は田舎に以て里
旅資をかく時は、所属に平御し、一宿一飯を乞
又馬借にて見に罵詈を受し事もあり、是を敵々
今かく諸大名にて人を動く、長安の大道を自在に
往来する事は偏に徳川殿の御宗門将軍家乃
法海依頼なり、努々おろそかに思ふへこのうすと西人
共俗の報恩を思ひ念佛也

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

四日淡路守叡山寺ニ而当住のもの中合佐渡守
ニ進し照胡　御目見并帳一巻を献せ坐縁の
而も後のもの　御出に有之　宿ニ而体由御行へき
御称光中ニ仰し進夫より実竪院ニ而文蒔場
院より佐味何連も　王師の客辨を間を入決あり
又松平紀伊守久通丹波守ホの宅ニ而王師の傳
達をニ後度　二所より葉子光を送る後大
名御騎中所より　王師を統領の使者来る
西上様の法成光ニ而帰而　帰師を参候あり
有ニ而難有此旨恐く　忠節を以て名字を給

江戸へ差遣
六日通辨様の御所居有之　二十七葉の名勝を賜る
九日淡路守の歌伺ひ候は有人とも登城仕るへき
のもの佐渡守より中来る儀く有人は兼く　御目
見は不仰出され候を通て大坂征伐のこと出
陣有るなる幸有人王師の名代として進発あ
用向は佐渡守仰付られ是事なり仍て有人此旨
江戸へ申差遣佐渡守く討向し御用此儀を霊ひ
以れ此度出陣中も不申知候しれとも罷有
を御下護し度先祖様前代御忘日ここし御霊

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

麻ニ無ク故百世ニ明リ主身ノ親ハ高坂洋正昌
信なるよし常く雙及しなり高坂を武多の二
法に在し信玄を補佐しく四天王ともいはれし
小腸頼ノ不来ニより玉を失ひしかはさて孫氏
あもあ思しや其方を父の心をいり察せるやと
かく當今此人を昔をのゝ意志深の習なれを其
方も甲斐の昔王をなりけりしく思ふやとこと思入
言上しけるを申し次ぐ勿躰なき事なり甲斐
の士ひけを時節お来まてひ其とけを武田兵法
有義ノ後言ニより木曽義仲彰朝臣の為に討れ

又其子孫木曽義昌がゝ先に木曽路の難所を案
内され甲斐士ひけおとに茶ノ父なとのいさ先を
用られす跡部長坂ノ倭奸ニのゝ座を案れ右
士契約を長篠に失されしより運命こちまた
傾きは茶が愚父在命仕里御所様をねしなるは
沼良ノ韓国を出て高祖に仕へしことく後茶仕り
御恩法に浴せしくは我ノ時ニ主ことまて
一生の良計見しく遠国の口碑ニのみ傳へて一
我の生宝さんなくは臣釋氏の茶さんも孫氏
此生は父亡命の時茶三歳ニ成て母ノ智に

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

て親門に身を成長しけれど衣食淨出門の為につ
なぎ今日御上様の御恩をてうく結構に身を寄せ
養ひ中につゞ唯々御利運を落し祈望なりけれ
ゝ此へ以ゝ中上又了明へ仰にゝ其方先年関ケ
原に陣見舞に来里し時近習の者どもれ東下景
勝西に石田にあり南敵の所ゝ所に了明来る筈
云ゝきゆしく披露成ゝしと行りし時其方ゝ云ふ
にゝ南敵御座下に来り後しく御利運を賀し
事深あに図出うしやと云しとて今に其方を身
をとらふしけれ随身上京の上は黒谷に住職さた

法徳が門流を再興させて中花洛の貴民ともを
教化して念佛門に入しむべし知恩院を満蓋完
戈勝学の恩師菩提所とさた先 先祖の連枝 超
蓋の徒をかしやかせり黒谷をもこれをつき菩提
所を准ぜんしと仰の時了明畏り唯落涙を又
み門ゝ念珠をつまぐり拝ひくこれを見に昔
大樹寺登蓋がさて絶し念仏いうなる陳中にも先
念也ずつ両ゝるを一にいふ孫然策のゝ先 二に無
天下此ゝ念佛中さもんがゝ先 三にも敬往生の為
なり何事も物を知る人かけしまを一生 若

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

も無用無得へし

一 御陣中何方ハ為見舞ニ来ハ共酒ハ無用也尤為
先祖方ニ御志酒肴布施ハ不ニ義送ハ可御事
行庇へ中達共上ニ安網て有ニハ

一 御直条倍ハ庇ハ対し不謂理非喧嘩ハ論ニ
無用也若此擾ニ無網於有ニ者御事行ハ所ニ上
御意ニ是ハ後ニ是非ニ無ニ免も無も相計可
申ハ

一 毒人相手ニ人を合セ御供衣ニ一ニ人御自然
大御所様御法ニ御雑談ニ為ハ可言

上ニ而論経論称ニ文義ニ依て事答称ニ可為
必不て致ニ御ニ語自然本擾ハ尋ニ節ニ遠ニ
候ニ程可得ニ

一 御佛事御用ニ人ニハ対し無略恒華て未結
ハ皆ニ御教来ニ事故自分ニ支配と不て存ニハ

一 御陣中ニ事 意ニ味方敵ニ事 諸刺不て致ニ

一 自然ハ本尊ニ垂綬有ニ者早迷て申越ハ
右ニ飯魚ニ可相守ニ者也

宮十月

増上寺国師
源誉

廓山叟
了的叟

此外書物にも陣中て時の事とも数多に其中幾こ
ま者 四日 係に御借の儀中をせしに依て彼返す
としてこれ相送 不なり
十三日に御深策 御目見に御付玉師 堂後に変
態に陣中尺籍叮嚀の玉なり深策も同様陣中
の様子て尺変されより玉に此方玉御へて中をせと
御付らる中泉御止宿濱松より新米を取しよせ
らま 大光院様の御迷 逮 夜の御姫 時あり三人へ

御銀或数ひと縮細を巻法をも下 夕御飯の後
三人 御目見に御付 安茂常刀同心と御に
性庇方と口論有 ゝ注を有こ
十四日雨降 大軍進て随来 宮原 森食安うしに見
僧英 西僧を御佛前だりに彼なれども何か四方
は諫言廃貶の所法 同様と耳に入 此常に世界と
観念にいとまなしあはれ天下一人に陥し万民安
楽に至らん 称門も安年なりへし 大坂の凶徒迷に
滅亡あまりし 御加賀濱名の本陣にそまりかへを
従軍吏くに移宿者 来当をいへも御寝所の

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

偏に清淨の所に候はこれは和尚の靈驗を仰まゐり
常に仰ても和尚の加護あまほ人安く寢食をもつ也と
難有き御上意に思候にも願徒の奸惡を忘れ念佛
誦礼を
十六日朝早く御堅免の御家臣松明を持て松原
の坂に迄みり左右の山に數丁の徑を御堅固の人
數挑灯を照し願徒惡旨(間)邪の者思ひあらん事
と探し求む今日よりを御和尚を万民たんし
こゝらし鎖を取し出迎者多し又寺院も遠く出拜
めまは恩報ぶとに御快然七時ゆゑ吉田城に入

給ふ六時ゆゑ藤の方御御士共を出御礼あり積
雪を物図をおとろかす其中悟真寺を前夫思候
等に對面の事あり其中物を回浪出投なり長光寺
夜を御城中に持て御寺に御座ゆゑ今宵大
坂の様子なりとて板倉備重より通使来る御前へ
百出され何に御密談あり其後九三藩に仰付られ
別封をきたされ袈裟を御ゆゑ五時ゆゑ思候を百
出さまし仰に云尚ゆゑ家代々住居の地なれば少
年此昔の事ともそろに思出し哀楽更ありし
城をのむかしは今橋と云枝理が先祖城を築く

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

の時川流にて石垣六ヶ愛あるしを吉祥山の文
殊に祈願し成就せしかは台祥の一字を因為に名
とをとりて吉田と改そのゝち敬若にしし時にて
先祖より家々山城にてこゼり合あり思へハ一昔
となり事も西蛮の義となれり其方に父の仕へし
信雲も山城にて人をとり先に家々お出にしに微運
にて事が敬来が敬ちし陳施に尚里藤原せられ
しより勝頼武勇なり里を頼こ其方に父并に昌
景ホカ陳を用ひす終に西敬を失ひ万民を苦
ましむ事尚西に生立後河に成長せしうど万民

を救ひ天下を静謐せんとおもふ人より自然と此
策運に及へ里其方なとも必自家のこ我興隆と思
ふへうらは八家十家皆以頼然の家なれば尊重に
よりて其先方此人頼なへし在来天海敬前に
て以通其所に西王を佛菩薩とうふいりにも万民の
父母なれはさも方家へし天海がおとき仏法の親
家なりと仰ぐ事
十六日山中法蔵寺に御立寺住持 御目見御初年
の男のみなとは 住出ちか稽新をも御目見ら 住付
菱川者に御伯 なりへ日迄と最後に御入隊あり里今

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

夕御城嫌伺のこと　御目見に　殊出ハ右院にて
大樹寺上人　信光明寺　高月院　大林寺　妙人寺
崇福寺　随念寺　光忠寺　行福寺　懐松寺
松應寺　源空寺　不断寺　誓願寺　棟岩寺
浄珠院　龍溪院　新海院　勝満寺　上野寺
本照寺　志福寺　妙源寺　紫円刑部　小尾但寺
伊賀八幡神主　池鯉鮒社人
此外堂近より右社の輩　殊出各松原十帖或ハ寺月
寺ニ而ハ或ハ枝柳或ふどう　いもとこの　其は　菜
なとを　馳しまる　又松平右衛門　中嶋与四郎　拓も

御目見に出張府御発駕より　無腹軌上掛　殺しく
あまど　今夕のことさは　見す　御城に　無所なきにて
思ひ　清披露の役人　いそさて　各寺よみ　遠へらも
あり　上様にはいつよりも　御表色清うらかにて
夫々御上意あり　四寺とも　御目見の人々ありしの
中に御朱印　頼ひくいはゞ下されさらもあるしまや
唯御上意に　とすれ　とりとの　御安元屋　御本学に
清菓子　其外　清結なども　結構に　仕付ける　妙源
ちは　御本学へ　有れ　されは　ちの本学なりし
右に御行を　蒙りしとしに　又大樹寺上人松應寺

行光明寺 大林寺 池島寺 高月院も本堂をおほ
恩僧も對面を是ゆへ法姫時を下され呉後二ツ
を賜ひ大樹寺上人へ黄金壹枚 法小袖五具外
法菓子なとも結構なり法眼元十二年の時登登祖
御年四ヶ出来なり是を傳人よとて法手つゝ
法菓子を賜里別に御出沼を十枚下されしと
上人より恩僧に法あいさつあり
十七日御かる谷護國へ御入城 右衛門督様に唱朝法
出城のよしにて法連のへ法臣下府たり里也今日も
少年前より法使来里法いそりしき法中に居れ

十八日大雨故濡し来いつゞと言上故御滞城江戸家
小田より此飛脚家来使者来て御目見あり里法いそが
しき法事なり里多方三府を召出され毎日御家用
にて御目見なり里しに依に御付に家信も當所を
家子の城なれを別ゆへ人やりくそりにを思ふなり
東山地繁昌もうゆ京大坂にも増るべしこゝ計を
京より江戸後府人の来ぞといひ伝法蔵東法之河
の中にて海を見ばゆ山海の陸物も国土なり山つゞき
此廣地をいづくにても菓昌もうものなりしとに今廣徳
大名の新に築きし名城なれを大坂にも者ゆへうぞ

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

伺の使札来る
廿一日前 於讃へ 御着江戸原より使者 注を引も切り
そ大なる門を西を江にかくこしとて 大御所様へ献上
其大サ数里 某も一見すいまだひかしす上様之事也
殆ふ来入といふ者来里 大坂の事を言上のよし
上様来入に向ませらひよく来まり 敵大坂の志氏を
底れ西さ家に行ひ 殆にかの方より利種と逆謀也
家り故に心なりす 秘伐を故を閣の時 此にとくなく
なりをいかて我軍向ふへき自滅を拒うて 要粮
ふ心に使に思へと浪へともの根を たらすそ下

安穏なる事 何る所しく 天に代里、原軍なれを
何度にても 出陣をへしと 其御気を吹三倍 其に
陣子のおなしくまていうにも一数多生とをこれらの
事にやと 推計里 来ら 遠 菩薩の法而 作と感し
入日明日を 東入との法 法本 其人 法 餅 菓子
法 其も 法 供養 菓に 相 頭部をきれ 花頭の仕
立なり
廿二日 東津 陣 者 吾 御 御 位 持人 家 舎を 法尊
様 ある 浄土 家 ぞ 言上 本 本を 宮を 也 殆ふ 所本 ちと
言上す 作事云 世を 万代なり 本ちを 宮 ます を 亀

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

御入様を管六半時なり御供養ハ夕御膳の動備
ハ過なり是中ハ菓子ハ初ニ不要ニ三人并御傍
二人とも小たいびき熟眠を御燒下に對し奥向
の様子を思ふに九ツ過と上様御寝なり里と見
えて御上臈ハ御上臈ハ御来上げし御看護ハ
御様御意佛ハ長夜をかりなりいつもよ里みしかく
又御いそぎの御様子御燒香御案内もなし御熟念
やく久しかなし御ハ御歓平定の御祈願ハ
かたし
廿四日曉七時御目覚のよし觸来ハ三人驚覚御

佛前ニ跪座御番の大伺ハ御祈願なく御様の上
御上意ニ長く右仮なり參用ハ西三日同無りもなし
今晴ハ三人ハ非時をふるまはんとの御事三人
難ハ感戴しまゐ諸ニ御寄年ハ御寄とやかなる
事家ニさん及ハ程なり いつ様天下の御
主となしもなく御方ハ世人ニ似ハ御丈夫の御事
なり此夕行桐東市正論元出仕の御此日ハ大坂
ニて皆右の人なり仮令侍臣ハ宮斗ニ寄屋ハ
自殺をよかし左右ハ御目覚を天下になき我
とくつぶやき日ハ御出仕の人ハも多くハ太

坂方より降策をつきしへ左今日よりへ呼仕方
發ひ子御上意の旨法を習の庇より取る又勅使出
入東の数も取る
古今日晴天なれども此第一表裏のひ子諸筆ふく
み洋さる發堂和歌ちと行相市正と事人を大好分
として越前後更洗ち後出国相大坂を攻らへし
とて手分此御付あり御る雲午刻大地震まて
禁中を勿論公家庇の御屋形向町中の出土物蜜
などを皆こゝ迷屋落壊御生けが人三万七千
余人即死事人此事人を親ふ孝者まて 関東撥云

の人佛法那番の悪くれのよしきれども不便の事や
寺院の本堂向など參分傾き御建難儀の御利
あ里但し二條の御屋形を何事もなし今朝より
遊し東福寺南禅寺天龍寺建仁寺南禅寺の大
庇凡百三十余人出仕の所法廣寺の天水桶落ち里
おくれ出仕の大庇三十人程落重小寺町の頃の上に
落ち里そのさ海いと見苦しく此大庇を皆写し
相御付ゆゑ此田なり凡 上様御学問好みなり
ゆゑなる写相先々中々御用法あ里宗傳長老兼
林院長々御付ゆゑ雲今日表向大庇へ出遊の程

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

大事と受時ニ不方角なと得るものなるに一言を
治免給ふへき御器量を括別のものやと申候りの儀
まて皆々噂ましと
十月朔日板倉伊賀守下知として其後の写本御付ら
出し金地院ニ三ヶ條を出され精を出せへし又三ヶ
規の外実用相正用又食頃の外此正用のよしとな利
足を明日まてを御所を始りて来拝望なれは傍ケ
言うすれよしな里大坂より上様をうらひ鉄炮を掠
来るものあり悪ひ家行の役人されを捕ふるのこと
手に及ぶ寸中く武勇此侍なれを山下喜内といふ

そのを投出し逃れ所を町内の者どもを取出らく
年ひける時やがて板倉より人数到里百捕覆ひ両
し先ける時渡邊内蔵助の組の者金子百両にて
母の一生を養ひんぞ先に国舎ニ送り自身が命を
悪粉云に来るとも云板倉其事を言上し母孝行
の為といひ太義に身命を惜しまさるものなれば助
命せへしとて獄屋ニ入金ら八時迄ハ幡正法寺正
福寺橋本大、与曾将法国寺出仕御目見外内観
音ちも百連来のよし各御目見の上白銀を始る是
等大坂へ御出陣の時自然御給筋なれば大坂より

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

いかなる君ひのあらんも計ひてこし檀家の業へ申
付あやしき者を一日も村にとらむべきこの紙作
合つる其上 御武運永久の御祈里十上 色きの方
あ里
二日知恩院知恩寺 清浄華院 金戒光明寺を右
辺 御同見の上 時彼の重ひ白浪五十枚 ひを賜
知恩院大僧正満蓉には別に白浪百枚 金襟を右色
紙子の巻 縄珠 [illegible]を賜色 ホ白 蓉に作合られしを
大阪英か 我を其にあるの事の来年ホを集め自然密
計ホある由 [illegible]に随ひ板寄人 内蓉 中出つきの義と

なり又當家門を御家方 右 准人より [illegible]
粉にとも別にあるべきこと 織位の檀家あらハ和平
の紙中 僧人 隆家の義相 [illegible] 中となりホれを
大上 椒御仁に添く 教多の業 [illegible] 御ふ事
之との御事ホ之一人も助けたく思ひ右なるべし
雖有御心全く阿弥陀佛の御変作ホ之 吉水の念
佛家を一天に廣く流布再興なし 弱ふ成べし 義
と云ひこれまで 祝進し 世中ホ之 此御君のみ佛法を
好ませ 無る御念佛 怠らせ ゆえぬ事 不思議のホ之
なり 某老年 師ホより 南都に遊学し法相家 三

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

を生ぜる事

五日は陣舶ありて 松平下総守 徳永民馬帥稲葉清路
守 石川主殿頭以下 所立東理の方々 勢多江戸より利
の道を出当 庇数多者あり 三宝院 圓満院 実相院
一乗院 大乗院 曼殊院 又霊澄守 中家守 宝鏡守
大慈院 光照院の出 厄庇 御月見あり 板倉氏 発出ら
家今宵を御父 隠宅院様の出 逮捕也 忽出仕時を
賜り出 菓子かろいも自然せうらん飄なとを出 供養
あり 御牌取 御拝柱され 口を返 三人を取出さる
佛法の出 雑談作出され 又歌味方 此来合戦を及び

討死の者をよく弔ひ申べし 五條人も 此方申せす
づきの旨作出あり
六日吉田梵舞 発出何ら書物の献上あり 御手つから
御上覧のうち 白銀を賜る 今日大阪の兵と河内橋津
の方にて合戦あるべしと 御上意あり 諸当庇出 精を
解きせるふづきよし 言上あり 何を父は一人なり た
とへ陣中にて其儀有るべ うしじと作あり 皆々思へ
天下を治火 多くる 大将軍を難有出 なり此時を致
そ知恵院より 御兄舞として 報恩守 浄教守 出仕
出 菓子 寄材を 秋上 南都 奥大寺 柘榴守 初潔守の

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

小池坊蓮華寺 鷲峯寺 来迎寺 大念佛寺 佐多
来迎寺 多武峯 吉野 橋本坊 内山永久寺 宝生寺
法隆寺 當麻禅林寺 宇多慶延寺 三輪 極楽寺 南都
称名寺 興福院 小出仕法菓子 松原十帖 御祈禱の
法札なと 勅上あり 御目見の上 何れも奉方の不取
不逮 雖帰り 韻陣の悪の者あらば 地下人をかたらひ
捕収ゆべき旨 上意あり 又和泉国 佐野上 若寺 奥木
西福寺 雖出これへ そなけて 遠方の不在候 あり 韻の
おそはん事 計里うたれども 門を大切に守り 檀
家の案へ申遣し 法陣方の庇 致しは 家々を陣不と

しん安くあるべき旨 仰渡あり 此中極楽寺 を法友
也 内々にて 頼のと 菜ゆ不に来り 内話あり 枝材
二箱 到来
七日 近侍度 鷹司度 西園寺度 勧修寺度 万里小路度
清閑寺度 鳥丸度 三條度 日野度 六條度 高辻度
御見舞として 余上あり 御封 同の上 白銀を賜し由
鷹司度の書物あらはし 法菓子を御本当に法例
饅頭五十あり 又九条度 二條度 ハ 嵯峨入法出 法答
意あり 此外数多 公家庇 余上 又加茂社 人平野松
尾神主も 雖出 地理 松梅院 三宮外坊 庇も御目見 有

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

僧家ニ至まで拙鶴集抄とすといふものとなし従
川家の豊なる事朔日北斗星ゟおこし夜の衰
微なる事御月のこし九日比仙洞御所より院
案の公家衆之人書物を大御所様へ御送りあり
南光坊附添来る書六日附より林道春を召出さ
連て御前に於て御尋之事ども案衆之人も抄録
仰付らる年代略類衰之代格勤衰変古語拾遺
令解など也上様御書物を好ませらる事かくの
ごとし御心を法度迄いふ斗もなき御心なし将仏書
儒書日本の古記録を閲せらる人利

十二日将軍様伏見より二條の御屋形ニ御入なり本
多も御目見仰付らる今日将軍様御出あるとて本多
佐渡守安房守常刀成瀬隼人板倉伊賀守大井大
炊頭安藤対馬守なとも祗候あり両御所様御茶
菓湯菓子を三人ニ給り候其より[illegible]御茶屋[illegible]着
なしそれより御両将軍様御伴衆ニ御相伴あり
御茶湯を被下人ニ仰付らる懐く摘茶を坊
主衆へ申され其上の床校樹藤菜子を御備今日御
右近よりの御遅刻御参せあり天下の二條城
味いかす枝柿を無数の承なりこれ福富氏に賜[illegible]

なりとて献上のよし
十二日江戸将軍様ハ御諱七字をさしよこされ
御陣中御手込なりしを聞し御上洛被成御在京中在役
いける事を御祈いのれとて当山桃井殿栗田殿豊
瀬殿御茶の御出あり知恩院方丈参上の下向
御下様御対面の上一宗の立締二十五ヶ条の事
御仕あり其上御脇差を下され御出座の中へ持出や
将軍様より白小袖十松風一箱昆布一箱御参上
あり方丈より松原二千帖紙子三枚を献上あり
浄運寺上人ならびに小袖ひとつを偶ち保法院當求

院は白銀十枚ツゝを下さる知恩院清浄華院金戒
光明寺清浄華院並其外大雲院も登城御目見あ
里其外の寺院数多御機嫌伺に参上ありけれど
御目見もなし七條道場の梅小路梅香を参る
茶は法儒あり本山にては御院宣より献上の御和歌積
なりとて作を佛へ
増上寺西御師より存意を御使僧として当上様の御
機嫌伺あり寺社江戸御若三千枚ツゝ枝柿昆布
各一箱ツゝ使僧数多入言上せしかど法中此度
御人若しかりすとて拝中大御所様は御目見

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

悉く御晴を帰り御小袖或白張ニ指扱を着成さ
れされ御中旅行中を急き何方ニも退届なし一
活府あるへきの旨安芸侯寄中様ニ而御供ニ明
晩ニ発足のよし旅ニ而とも書札の返ニ答候
京都の金襴はか下され是ニ巻并ニ綿絵ニ巻
京都并一箱を二ツより思ひ候へ申上す招待様
今日も方ニ及ひ伏見にハ御泊綿達中御供之の
提灯万燈のおひたゝしく御道とも御中旅行ニて御出
の御様子ニて諸人も御心配なく信長卿の御出立
まて御ちゝ記され御小性十八人并台場千本余

御用被下く一時斗ゐて御出あり誰も知る者なし
御城御のおんる大勢御供をるゝく伏見には御泊里る又
本多上野介殿御家来の里もしとりニ詳なる事
知る者のなし
十三日先達る大坂にて御出し御供若殿あり何か御出
小御家供あり又江戸より内府殿にては明後日
大御所様御発駕なりとて大坂ニても其しりから
御出陣大谷御旗本の面々旗本出馬ニ発駕のこし
らへ某ニも御家の様子ひまかへしと御沙汰より
御仏具類を差行付候し無朔無夕の御開あらせ

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

何方の者なりて敬しこんを大御所様は側さゝ寸
の法師或者なれを無愛法等とても敬しこふいうてか
勝るべき當時日本の大御所様の御法の僧なり法
礼申べからずと云られをかこかず彼人更奈御是唯
ゆるさせるへ敬こそ寺田村ざこ村久世おより此百
性人更にて法僧を人の役に当れるなり無礼此先
あるべしとこひられを某も年のとくに落し百性
まて夫役にかゝる事も年ゝある者なり以後施行
当里て死なんも計らしかゆゝある世の中を夜
に出し居れ大坂をさんせし給へを此所来日本に

戦をなき事なき方にとき此志まてもあれませ
給ひての御軍なれば大切に役をつとむべし此
度さん其先ば子々孫々伝のゝらふもなし農業を
精出されて年貢なども其先役金も減少するなり
とも安せしかば大に飲びまてを各々方をよくる
を弁へ為へ事法方々なり無礼を許させ多人とて
大坂(切イ)に加る給をかく今宵木津へ法着法止宿の御出
あるされども此要害の地にあらず大河にあれども
来る伊賀路あり西を廣しとして大坂方の使あ
まばとて係に法湯漬百ばれ此後十日に誇まて

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

へのこ先なをと十人斗づゝ先を揃ひし強弛の中をかけ
入るほどに人数たちにはれさて其田氏も此事にて
其中されば万一本村氏の孫者なれば後日の中伏
いかなり其上先刻より此言葉をし歓なるに後体
より強き立べきに静なる事いかさ両歓味方のと
かち斗里なるし知るに世の中をし歓にをせよ傍
頂によりて其方川里皆まる世の中なり根に強弛
おべうず他し万一家康公に相違あるに後より
遅とも此あそか両ましと大吉あげ強弛を引段体を
双へ左右に見れ通りけを目をそ相たずに入るに

上様出家様を戸とち知らかず左右より出勢籠の
間一見いしたきと大吉揚れどいちをやに出急や
三丁程切し論よりか此筆勢つきんに退来る来
筆出論なれば誠に万をく成れをとをいうちもん
とくそくのまし三人論を屋りきれば成瀬年人正
安養常力安藤對馬守在てうへし戸川紀伊守の子の
大石ほも一同無を改先きを合戦とも庭出勢籠を
四方論にて当護し南部へ急きなに論より数百人
の軍兵退来り強弛を可二可敗ち忽ち弓を射か
事又強大力にて向ひれば三ヶ一をおき味方と云

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

長途の草卧を上顔の計畧定りくれを聞く討
死と思ひつゝ免しに無候にや 某等三人の外 黒装束の
大法師武者顕連顔を追散しその長刀のきゆり凡人
とも思えれず是にはむかふ者 同ならみ魂とひ以家
にや 自然と同絶しければ是に刀を差く味方の
案に引かけ十四五人にて切ふせられ 敵数十人討れ
礼軍となり 当人も両をさして 敗走し夕暮に及ひ
所はより追く 味方の法伝 来里 居りて 戦のある
事を受ければ 上様とはしらず 何にもせよと 急ぎ追
付 是ば 早く 今を 勝るを 所なく 六本は 来られ

着す今宵 安夜 当人 成瀬戸川にを 百里法蔵 見あ
里 某三人をも 百里軍中の 心得 非如 なりとて 法に
神こりを 賜る 扨 黒装束の 法師武者顕を 十方に
追散せしを 何人なるやと 法尊 あ里しかぶとそれ 其と
中そのなし 依て 見そかに 御本 号を 知しかん 口 鉄
炮のあと二つ 法足にどろ付 居られば 某を 百礼 扨
も 寛永の 常陽 かれ 今日 本 号 悪徒を 追ちらし
家 名を 救 はせかん 里とて 法伝の人 にも 扨を 許
しかん 其 某 を 係る 使人 中べしとて 塩 法 山城に
作付 是 法 兜の 神を 法伝 堂となしかふ 此時 戸

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

川を十五歩所く本当此御事子となるんに得なり
とて 先祖より里の日蓮家を改 某の日保を更ふ家
安養對馬守を 其本当を某代し源九郎義經より
源家里姫に傳を里 夫より先祖持傳へ高田流なれ
と御陣のまゝを今此御家門に改むへしと某へ給
ら家 上様を唯此信敬御増をいはし 大切に致す
無き此御あるさて其軍敗て入着れ 此七日のあ
中しきを信出され 家同出發運を真田の源智も及
事あるさす 此家の軍一日半日の間 大坂亡ひ一
天平治るべし 軍勢各々切を励さば 子孫所く安

樂を更へしと御あり 夜九時に源策を百出され今
日本当の現鎮 末代迄も忘るべからずあれまで 敷設
兵鎮を蒙る事あり里といへ 夫を小身より此事にて
さまでとも 是ざ里しに 今日を一天の一身万一あや
まち行る時を 御家の者に及べ里 御るにあやしき儀
敷ひ給へるを 平生信敬の御るべし 此事を西御
に守せよ 御こけすべし 其方江戸に御り 此事謂を
傳へしと御手自黄金紗紋時服三を賜る 源策
帰刻用之し 江戸に御る 某出礼を西御に送家
右御陣中依 御一書呈 御之 仕候 柿咲日

御所様従来御家臣に御忠行之為様之事不図歟
兵真田左衛門佐が下知之由与数百騎左右を割渋
抱弓張を以　御先兵左右を固以変味方人数漸
三四十人既御通行之御難此以上之処滅敵　安藤
氏之智計之言与漸御通之事之処俄に御分
起来御警悪危従佐一同身命を捨て中之処
御求尊化人身以黒御装束之御金身額を十方之
辺拂之様之処敵兵自然身縮退再相向者無之
依之称御信仰御増進御海敬百倍前日右之様
玉帰之為要得て申旨仰　御如此御座候　粗委曲源

第可申出忠惶謹言
十月十六日　了朗
廓山

十六日御所様朝早く御所様御奢侈法隆寺法着
諸堂三十ヶ所悉く法様覚住様を右是　上宮に当
寺事数百年来水火盗の為に遊をして昔を見る
事いかにも自然後事なり　諸国に霊場変しと云へ也
昔より諸難を免れ安全なるを知し且右力力
ホを持事昔より智ニ守数万に同人にれとホれ
さん先そ御姉のくり里なりしに家不入を右力力を

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

砂糖漬などを菜等に物ひ佛に云今度大阪落城
の上は家も年老これを世界の事を一向にうちすて
将軍に任を執政とも云ふ秀斗はすべしさて其後は子
孫の長久を計らんがこれ家神と現在天下の諸事にて
あるべし先年より吉田神龍院より神道の伝授を受
南光坊より南部の神道をもうけられ大蔵冠の例に
よりて一子を出家させんと思ひしに知恵院の満巻の御
祭祀より八の字を申うけ海去門主とせり時家相家
とすこ連て法川万代不朽の盛筆なるべしその方ども
がんばれ乞て海上に往生し還来穢出と思ふべけれ

西師も常に其事を言ひ此のせきれど極実の論など
は通途の人の申さたこと家にときは此身出に神に
現し子孫并天下の民をまもらんに何の不可かあらん
其方とも幽府の上は西師によく此事を申せすべ
しけ来必いさせん申師じく信仰に家有人有伏し国
主は悉く菩薩の修行他にましませば来等の斗里
知る所に来礼なくは唯御運用如何御断にまし
ませんとも如くも佛出の方西師へも能申せすべしとて
申上
十七日関国より信吉に御看津江戸将軍様は平忌

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用

城より後愛又会議大軍にて討出中に付諸陣仮仕
はと申上ゆゑば仰に城中殺ゆ出にても七万程や
通ずは城に殺るべし何そ大軍といはんやかゝる時
には敵陣に威を付ぬものなり味方はよろみとなる
にはあらざれども味方に對しては大軍などゝは云
無うゆゑ其方は元甲州にて使者をも勤者の悴
なれば父より万事心得もあるべけれど甲州にては一
万人以上は大軍と云ふべし今日本国の軍兵の集
まし軍なれば一言一向も心付なくては諸事謬あり
そのなり此末よくく考へ申べしと上意なり仕候

無面の上は此頃は下里本多佐渡ちに付くは仮義い
うゞ此間あまりとく伍州又は前日出右の事申上られ
ば二言にならぬ夫には及ぶ城から事とは遠あり
一言の下に何ぞ勇士に能を與へんや以来これが心
得のこゝろ小中安せし計なりと仰あまり此位を安く
その神智仁智の御大将と答申ける是にても一向は
どんちやくなく此急佛あり此頃の亂は一向に手の
いぢをは里勇年を場力を出しけれと一向は接近
やありて安愛常力来られ敵討にもなく宣軍にも
なく城中の者どもの目減やまゝ　きはと相見へ大軍

兵をくり出し日根子に相見え日常諸手一同手配の合
図に致るさ相止ゆれと言上しければ諸大名面々に
持口あり三持口の頭りをより注をなられば諸色に
そなる思ひなり此末もさゆゑ相見使者を注を
の後ゆへ三藤によりて何人も何ヶ度も注をあるべし
家評定程にさゆの事を及ぶまし 殊に老切の
者共数多あり三方共がいとき智勇の業を発れ
ば昔を大軍此人数も小勢に負けれど此度なとの
合戦を味方に負といふ事をなき筈なれば我を
大安心を枕なり此軍をてのち三方とも此を始

和根護代の大名来 子孫長久に鎮楽あるべし 常刀
も此人になりて智勇を励し子孫の後業を行う
べしと仰あり此御上意を取る者雖有かたさ家
志なし某へも五六人より噂をしる家今宵四時高洲
より御城嫌伺の使僧 関諦来る越前生書紙平
帳御菓子 一箱昆布一箱咱朝御目見あるべき所
言上の時軍中を事多し明朝いつなる事に御延
引もそう星かたし 高洲よりの使僧ならば人をくる事
なし江戸の根子も世に小吹べしくるしからずとて
嶺の方へ来時俄に 御目見仰付らる御恐の上意

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

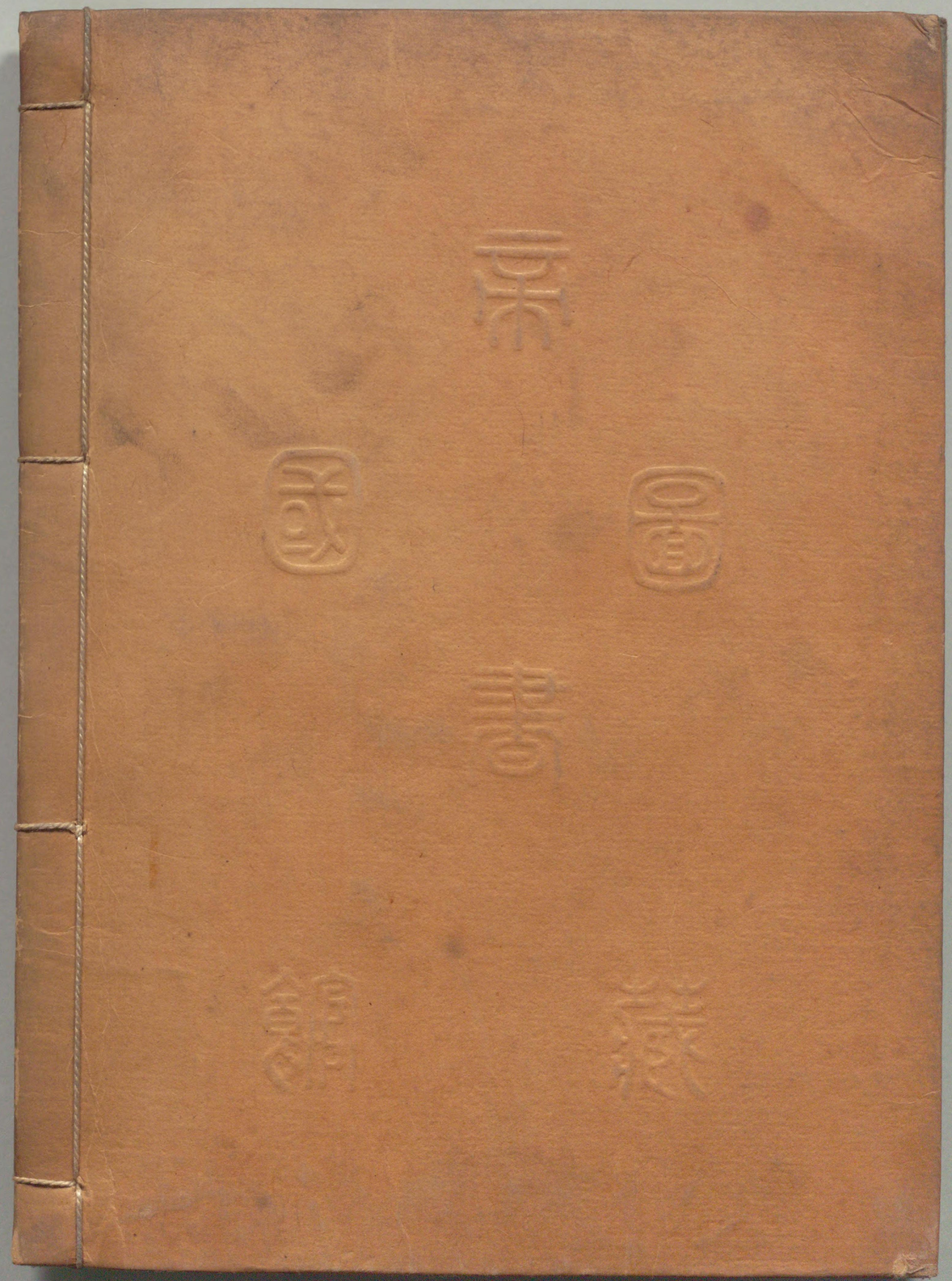
の上明朝御祈申さるへはれど御事多く府廓山ヶ御
まて休息あるべしとて此菓子を下され明後日東遊
場府をべしと僧出さるに此時何か御内話あらせられ
しかゝ之とも笑諦秘して来ふきゝ語る可

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16
ガラス使用

わ
210.09
16
317

国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用



国立国会図書館　部類記 わ210.09-16

ガラス使用